



# 清新二中だより

## 本校教育目標

- 1 豊かな心で、互いに敬愛できる人（敬愛）
- 2 進んで学び、深く考える人（知性）
- 3 健康で明るく、自ら鍛える人（健康）
- 4 責任を重んじ、勤労を尊ぶ人（責任）
- 5 礼儀を重んじ、他とよい関係を築く人（礼節）



## 林間学校 — 100倍はいい —

校長 白石 亨

丸々と太った真っ赤なミニトマトが鈴なりだった。

食べてみると、じゅわりと瑞々しい甘さと酸っぱさが口中に広がった。もぎ立てのトマトには、真夏の太陽の強い香りがギュッと濃縮されていて、格別な味わいだった。

この美味しいトマトを頂いたのは茨城県常陸太田市。夏休み7月下旬、2年生林間学校でこの地を訪れた。

そう、2年生の林間学校の一番の目的はこの地での農家民泊。林間学校の初日、「初対面の農家の方々と上手くやっているだろうか…」などと心配して、地元の方に車を出してもらい、2年の先生方と一緒に各農家のお宅を巡回した。だが、その心配は杞憂だった。生徒たちは実に生き生きとしたいい笑顔を見せていた。ある女子のグループは、農家の方々と一緒にブルーベリーを摘んでいたが、先生方を発見するや否や一人が駆け寄ってきて、「先生！このぐらいの色の実が食べごろです…」と丁寧に教えてくれた。教えてもらった先生はビックリ。その先生曰く「普段なかなか自分から話さない生徒なんです。それが明るい笑顔で積極的に話し掛けてくれたんです」と実に嬉しそうにつぶやいた。

また別の農家では、ピーマン、ナス、ミニトマト等の夏野菜を収穫していたが、ある男子は「先生！N君はトマトが嫌いなんです。今まで一度も食べたことがないんです。でも、さっきミニトマトを食べたんです！」とやや興奮気味に大ニュースのごとく教えてくれた。そのことをN君本人に尋ねてみると、自分でもなぜトマトが食べられたのかは…わからないと言う。少し恥ずかしそうに、はにかみながらいい顔で答えてくれた。

普段、学校ではなかなか見ることのできない生徒たちのとびきりのいい笑顔。ある先生は「学校より100倍はいい顔ですね」と言っていたが、自分もそう思わずにいられなかった。

今回、林間学校でお世話になった茨城県常陸太田市。本当に豊かな自然のど真ん中にある。

この自然は、東京のどこか角ばった人工的な自然と異なり、あるがままの雄大な懐の深い大自然だ。この自然の豊かさは、きっと誰の胸にも沁みわたり、気持ちを癒してくれるであろう。そしてここに暮らす農家の方々も自然体なのだ。生徒たちをお客さん扱いせず、夏休みに親戚の子供らが遊びに来たように接してくれた。変に飾り立てず、でも冷たいわけではなく根心がとても温かい。だからこそ生徒たちは田舎の暮らしぶりを五感で体感し、その澄んだ空気感が伝わり、生徒それぞれの心が洗われ、一気に心や気持ちが解放されたように思えた。豊かな自然と農家の方々の優しさ。それらが生徒の屈託のないピュアな顔を引き出してくれたのだと思う。

その一方、私たち教員は普段の学校生活で、生徒たちのどんな顔を引き出しているのでしょうか。

「学習面」「生活面」「部活動」等の特定の観点ばかりの限られた顔ではないであろうか。また「信頼し、任せて、支える」。このことが教育の基本であるにもかかわらず、ついついこの基本を忘れてしまい「あれをするな、これをするな」と、リスク回避が重視されて、生徒たちを過度に管理している面があるようにも思われる。知らず知らずのうちに生徒を委縮させ、本来の自由奔放さや、洗練とした笑顔を奪っているのではないかと。

生徒は様々な顔をもっている。大人の知らない顔をもっている。

林間学校での生徒のいい顔に出逢うたびに、このことを考えさせられる。私たち教員は決して驕ることなく、生徒の心の奥底の内面の顔をもっともっと理解しなくてはならないと思う。そして、いかにして表出されていない生徒のいい面、いい顔を引き出すのか。それが学校として肝心であり、また大きな課題であるように思われる。